

# 疎外と共感

浪花博  
(佛教大学文学部教授)

## はじめに

現代は不安の時代といわれる。病氣、死、天災等に対して不安を感じるのはいつの時代にもみられたことである。しかし最近では、交通事故やガン等、本人の予防や注意だけでは安心できない災害が増加してきている。しかも、不安を感じるのは成人ばかりではない。幼児や児童、中学生の時期にも、不安をいだく子どもたちが増加してきている。日頃心理治療に従事する者として、この点を強く感ずるのである。

一方、中学校や高校で生徒の指導に当たる先生たちと接すると、最近の生徒は、「疎外感が強い」あるいは「こちらの熱意が通じない」という訴えを多く耳にする。このような疎

外感や共感の欠如はどのようにして生ずるのであろうか。現在の学校教育においては、人間関係、子どもの理解、心のふれ合い等が強調されている。にもかかわらず、このようなことが起こるのは、どうしてであらうか。その誘因は多様なものが絡み合っているのであるが、その一つの基盤となるのは、基本的安定感の欠如である。本稿においては、この基本的安定感をめぐって、若干の考察を試みたい。

## 一、人間の特徴

人間は哺乳類である。哺乳類の特徴は、胎生と哺乳ということである。このような特徴をもつ哺乳類の中で、人間には他の動物に比べて、特異な点がみられる。それは出生時の状

態である。人間以外の哺乳類は、出生後間もなく、自分の足で立ち上り、自分で移動することが可能である。したがって、自分で母親の乳房のところに近づいて行くのである。しかし、人間の場合は、出生後約一年間、寝たきりで、立つことも、歩くこともできないのである。他の哺乳類は身辺自立が可能ない状況になって出生するのであるが、人間は、身辺が自立しない状態で出生するのである。ここに、人間は生理的に早産であるといわれる所以がある。したがって、人間の場合は、他の動物の場合のように、『哺乳』という言葉よりも、『授乳』という言葉のほうが適合するのである。

## 二、全面的保護

乳児は、ある意味で、無力な存在である。もちろん、乳児も、泣いたり微笑したり等、外界に、能動的に働きかける積極的な存在である。しかし、食事、排泄、着脱衣等、身辺の処理については、まったく自立せず、無力である。このために、乳児は全面的に保護されることが必要なのである。それは、一部分の保護や、部分的な介助ではなく、まさに全面的な保護なのである。約一年間、このような全面的保護を受け

て乳児期を過ごすというのが人間の特徴である。したがって、生後三カ月目や六カ月目に、人間と他の哺乳類とを比較すると、運動の発達や身辺自立に関しては、人間はまったく劣弱である。このような状態が約一年間続き、その間に、母親から全面的に保護を受けるということが、その後の人間のすばらしい発達を約束するものになっているのである。

## 三、絶望的悲哀から絶対的安心へ

乳児は、空腹になると、泣くよりほかに方法はない。空腹になり、泣いていて、間もなく授乳されると、そこで満ち足りた幸福感を味わう。この体験が非常に意味があるのである。空腹は、乳児に限ったことではなく、成人もまた体験する。例えば、仲間とどこかへ旅行し、ローカル線に乗車したとすると、昼が近づいて、A駅で駅弁を買おうとすると、誰かが、「この沿線では、二つ向こうのB駅の弁当が名物だ。」と発言し、それに従うことにする。しかし、目指すB駅では、弁当が売切れで購入できない。その後は、終着駅まで何ら入手できない。仕方なく、持ち合わせのわずかのオヤツでひもじさをしのぐこととなる。「何の因果でこんなつらい空腹を味

わねばならないのか」というのが、一行の共通した嘆きである。少しオーバーな表現かもしれないが、空腹の悲哀を感じるわけである。しかし、この場合は、「夕方になれば、夕食にありつける。その時には、昼食の分までしっかりと食べよう」という、いわば保証付きの悲哀なのである。

これに対して、乳児の場合は、これとはまったく様相が異なっている。乳児は、意識がまだ十分に発達していないから、空腹で泣いていれば、授乳されるということを予想できない。したがって空腹になり、泣きながら、このままひもじさと涙の中で死んでしまうかもしれないという、まさに絶望的な悲哀なのである。先の見通しもなく、悲しみにさいなまれて、泣いているのである。ところが、泣いているその時に、どこからともなく、「あらあら、おなかすいて、ごめんごめん」と言いながら、母親があらわれ、乳房が哺乳びんがやってくる。こうして、授乳されて、まさに満ち足りた感じになる。これはまさに絶対的安心感と称すべきものである。このように、絶望的悲哀から絶対的安心感への体験が重要なのである。乳児期には、空腹や排泄の気味悪さ、寒暑のつらさ等は絶望的悲哀につながるものである。この折々の絶望的悲哀が、

母親によって解消され、不快感から解放されて、幸福感を味わい、絶対的安心感に満たされるという体験が約一年間続くのである。この体験が子どもの心の成長の基礎となるもので、きわめて重要なのである。

#### 四、基本的安定感

乳児は身辺自立に関してはまったく無力である。無力であるがために、どうしても全面的な保護が必要である。全面的保護というのは、前述のように、空腹になれば授乳し、おしめがぬれて気持が悪くなれば、乾いたものに取り替えるというようなことである。このように、食事、排泄、着脱衣、清潔等、あらゆる面において、全面的に保護を受けるのである。このような体験を、乳児期にくりかえし、くりかえし重ねていくということがきわめて重要なのである。このような体験を重ねる中で、子どもの中に基本的安定感 (basic security) が確立されるのである。

自分は一人ばっちで生きていかねばならない。しかし、どこかでやさしくいたわり、愛してくれる人とながっているという安心感ができる。また、人間は生きていくうえで、い

ろいろ困難や嫌なことに也會う。しかし、なんとか切り抜けてやっていけるという安心感がある。これが基本的安定感なのである。生まれてから約一年間の母親のやさしい養育を通して、子どもの中に基本的安定感ができるといことが、非常に重要で、これが将来の人間関係の發展や社会生活での適応の基礎となるのである。

これについて、最近いろいろの研究の報告がある。妊娠中の母親が刑務所などで受刑する場合がある。こうして、刑期中に刑務所で出産を迎えることがある。このような場合、刑務所の中で、乳児を母親が育てることは困難なので、施設へ乳児を委託することになる場合が多い。ところが、母親が自ら育児をすることを強く希望する場合もある。ところが、刑務所は乳児の育児には適當ではない。ベビーベッドその他、乳児の保育の設備は皆無である。採光、換気等の環境的条件も望ましくない。しかし、母親の熱意と条件をいろいろ考慮したうえで、刑務所の中で、母親に乳児を育てさせようと決定されることもある。

一方、あと半年ほどすれば、母親の刑期が終わり、刑務所から出所するのだから、その半年ほどの間、施設に育児を委

託しようと決定されることもある。刑期が終わり、出所した時に、母親が引き取ればよいではないか。設備が整い、保母や看護婦等、専門家の揃ったところで育った方が、子どもに対して望ましいではないか。このように、育児に関して二つの場合が生じてくる。

この二つの場合を比較すると、実母が刑務所の中で育てた場合の方が、設備が整い、専門家のいる施設で育てた場合より、子どもの發達はすぐれているという結果が認められている。ここから、育児には、設備や環境よりも、母親が子どもをどうするかの方がきわめて重要であるといえるのである。母子一体の關係の中で、その子が将来生きていくうえにおいて非常に大切な基本的安定感ができるかどうかが問題なのである。

## 五、母性的養育体験

基本的安定感の形成には、子どもに接する母親(あるいは母親代理者)の母性的な養育が不可欠である。乳児の成長には、母親のやさしさと温かさが重要である。この点に関して、ハーロー(Harlow, H.)の有名な実験がある。彼は、生後間

もなく母親から離れた赤毛ザルの新生児を金網で作った二つの母親といっしょにした。一つは金網を露出した『針金の母親』であり、他は金網を厚地の織物でおおった『布の母親』

であった。両方とも、胸には哺乳びんがつけられ、かわいいたるの顔でかざってあった。その結果によれば、布の母親からミルクを与えられた子ザルは、ほとんどいつも布の母親にすがりついて過ごし、針金の母親の上で過ごすことはまったくなかった。一方、針金の母親からミルクを飲んだ子ザルも、ほとんどいつも布の母親のそばで過ごした。彼らは、ミルクを飲むために針金の母親に登るが、飲み終えたと、布の母親のもとにとびかえた。また、子ザルに恐ろしい刺激を与えても、同様に布の母親の方へ走っていき、しがみついた。また、針金の母親と過ごした子ザルは、布の母親と過ごした子ザルとくらべて、恐ろしい刺激や新しい場面に對する恐怖や動揺が強いことも発見された。

このような結果から考えると、母親から受ける温かい、やさしい接触が乳児の成長にいかに重要であるかが理解されるのである。それとともに、母性的養育体験の積み重ねの中で、子どもの心の中に基本的安定感が確立されるということが確

認できるのである。

## 六、母性喪失

ところで、中学生や高校生で、問題行動を引き起こし、集団生活に不適応を示す場合に、その両親と面接し、本人の生育歴についていろいろ調査すると、ここでも興味ある事実が共通していることに気付くのである。

その第一は、母親が、「つめたく、きつい」ということである。子どもに対して、愛情をいだかない母親はない。母親自身は子どもを愛していると考え、また、子どもの問題に對して心配もしているが、現実に子どもに接する場合に、合理性が優先し、テキパキと割り切って処理し、自分の期待や予想に反すると、冷たく拒否するような態度が目立つのである。そこには、いわゆる『おふくろ』らしいやさしさや温かさが欠けている場合が多いのである。

次に、本人自身に關することであるが、乳幼児期に、十分母親から手をかけられていないことが多いという事実である。母親に、この子の幼い時に「手をかけましたか」とたずねると、ほとんどすべて、「親である限り、手をかけましたよ」

と、そんなことは当然だと言わなければならないの顔で答える。しかし、問い方を変えて、本人が幼少のころに、「手がかかりましたか」とたずねると、返答は変わってくる。「この子はおとなしい子で、ぐずぐず言うこともなく、だまって寝ていました。あまり手がかかりませんでした。」という場合が多い。

つまり、問題のある生徒の場合には、つめたく、きつい母親、（やさしさや温かさの乏しい母親）に、あまり手をかけられずに、乳幼児期を過ごしていることが多いのである。つまり、乳幼児期に、母性的養育体験、すなわち、やさしく、温かく育てられるという体験がきわめて少ないということになるのである。

このような場合、母親の責任だけを追求するわけにはいかない。しっかりした子に育てたいという親心から、幼少期から厳しさを中心に育てた場合もあり、また、子どもがおとなしかったために、親が手をかけずにすんだという不幸な場合もある。いずれにしても、乳幼児期の母性的養育体験の欠如から、基本的安定感の確立が不十分となり、それが問題行動の発生の主な要因の一つとなっている場合が多いのである。

不幸にして、幼いころから施設の中で、母親の養育体験を

知らずに、ずっと成長していく場合がある。また、乳幼児期から長い時期入院生活することもある。このような場合にも、当然母子一体の養育体験が欠如する。これらの場合に、ホスピタリズムという現象が起こることは周知の通りである。時には、身体の発達も遅れ、知能も遅滞し、無関心、無感動、無気力となることが多いのである。ここにも母性的養育体験の欠如からの基本的安定感の確立の不十分さが起因していると言えるのである。

## 七、疎外感の発生

基本的安定感とは将来の対人関係の発展や社会生活への適応の基盤であるということは、先にも述べた通りである。母子一体の養育体験の中で培われた基本的安定感とは、子どもが成長して、母子分離をするときの基盤となるものである。子どもが成長して、家庭、すなわち、母から分離して幼稚園などの集団に参加するような場合に、どんな子どもでも、いくぶん不安を感じるものである。しかし、このような際に、基本的安定感の十分確立されている子どもは、母から分離する淋しさ、物足らなさ等を感じても、どこかで、自分は母親とつ

ながっている、少し不安があるが、なんとかできるという安心感をいだいているのである。また、集団の中で、困難なことで、嫌なことがあっても、なんとかやっていけるという安心感をもつことができるのである。さらに、発達段階のいずれかで、一時的に問題行動を引き起こしても、基本的安定感が確立されている場合は、そこから回復することが比較的容易なのである。いわば、基本的安定感は、困難や問題から立ち直る復元力となるものである。

ところが、基本的安定感の確立が不十分な場合には、とくに不信感が強くなる。周囲の者が親切にしても、その気持ちをそのまま受け取ることができない。そこから、集団に協調できず、孤立することとなる。困難な課題に対しても、積極的に取り組むことができず、挫折感をいだくことが多い。こうして、虚無的になり、周囲に対して無関心となり、無気力となる。このように周囲に対する疎外感が強くなる。しかし、自分ひとりでやっていくだけの力もなく、あげくの果ては、攻撃的な動きを示すことになる。つまり、基本的安定感が欠如している場合には、新しい場面や困難な課題に対して、安定しておれず、深い不安とつながって、以上のような疎外感

をいだし、不適応を引き起こすこととなるのである。

## 八、共感の欠如

先にも述べたように、母子一体の養育体験の欠如から基本的安定感の確立が不十分となり、そこから社会生活に不適応を起こす場合が多い。不幸にして乳幼児期から施設の中で生活して、ホスピタリズムを生ずることも多い。しかし、施設で過ごした子どもが、すべて歪んだ性格になり、不適応を示すとは限らない。周囲の理解と協力のもとで、本人が努力して、社会的にも成功している人もある。かえって、家庭の中で、両親の温かさの中で育った場合よりもしつかりして、大人になってすばらしい仕事をして、例えば、自分で事業を経営し、何人かの従業員とその家族の生活を支えている場合さえある。

このように、幼少期から親の愛情を知らず、施設の中で成人し、本人の努力によって成功する例もある。このような場合、施設の中で幼少期から過ごし、小さい時から鍛えられて、自分のことは自分でちゃんとやり、しっかりとて、独立心もでき上がり、努力していく根性も持っている。しかし、一

つ欠けたところがある場合が多い。周囲の喜びや悲しみがわからない。つまり、共感に欠けるのである。本人自身は頑張って努力し、何物にもめげない強い意志を持っている。しかし、周囲の者の弱さや悲しみを共感できないのである。例えば、従業員が、「社長すみませんが、きょうは、家族の者が、朝出かけるときに、加減が悪いと言っていました。仕事を早く片付けますから、一時間早く帰らせてください」などと言うと、「君は公私の別を混同するのか」ということになる。「仕事を早くするのは結構。しかし、五時までの勤務は五時まで。お前が早く帰らないと、お前の家族は死んでしまうのか。」と、こんな具合になるのである。このあたりが、温かさが欠けるというか、他人の心配や悲しみが感じられない。つまり、共感が欠如するのである。

## 九、情緒の未成熟

共感の欠如は、現在の青少年にも顕著である。小学生や中学生の時期には、互にケンカをするものである。子どもはケンカによってたくましく育つとも言えるのである。しかし、最近の子どもたちのケンカは、従来と異なって、傷害事件に

なる場合が多い。「お前、生意気だぞ」と言って、相手を殴るようなことは、いつの時代にもみられる。しかし、以前は、相手を殴りながら、相手がある程度ダメージを受けたところで、こちらの攻撃を収め、ケンカは終結するのである。相手があやまったり、泣き出したりすれば、そこで終わるのである。傷つけて出血を見るようなことは滅多に起こらなかった。しかし、最近では、相手が打撃を受け、「参った、参った」と言っても、結着がつかず、とことん攻撃を加え、傷害からさらには殺人にまで拡大するようなことになる。

このような残忍な行為は、相手の痛み、つらさを感じ取れない、つまり、共感の欠如から起こるものである。人に愛されたことのない者は、人を愛することができない。また、人に親切にされたことのない者は、人を親切にすることができないのである。したがって、共感の欠如も母性的養育体験の欠如から起こることが理解できるのである。それとともに、加害者の情緒的混乱がその要因となっていることが多い。このような情緒的混乱、情緒的未成熟もまた、幼少期の母性的養育体験の欠如に起因する場合が多いのである。

情緒未成熟の子どもの場合も、幼少期の母性的養育体験の



欠如と基本的安定感の不十分さがその要因として考えられるのである。基本的安定感が十分確立されていないから、外からの刺激や働きかけに対して、不安を生じ、そのために、それらを素直に受容することができず、情緒の混乱を引き起こし、不適応な行動を展開することとなる。仲間からの親切的協力や、教師の指導の熱意を素直に受容できず、自己本位の歪んだ解釈のもとに、集団から離反したり、教師に強く反抗するようになるのである。

## 十、疎外からの回復と防止

以上、基本的安定感の欠如による疎外や共感の欠如、情緒的混乱等の問題を考察してきた。このような傾向は、今後ますます増大するものと考えられる。このような子どもに対処して、改善をはかるにはいかにすべきであろうか。また、それらを防止する方途として何か考えられないであろうか。それらについて考察を進めたい。

まず第一に、そのような子どもに日常接する者、例えば、親や教師が、彼らとの信頼関係を作り上げることが重要である。不安に根ざした不信感の強い子どもであるだけに信頼関

係を作ることとはきわめて困難である。先入観をもたずに、とらわれない純粋な気持で、彼らの感情を受容しながら接していくことが必要である。このような暖かい受容的なかかわりの中で、子どもは、不安を徐々に解消し、乳児期に十分体験し得なかった母性性とのふれ合いを再体験し、基本的安定感の確立をはかるのであり、さらにそれを基盤にして、心理的エネルギーを備蓄し、自我を強化して、成長を遂げるのである。このような関係を集約した強力な営みがカウンセリングや心理治療である。したがって、問題が重篤な場合には、専門家に委託することも必要となる。

一方、前述のように、基本的安定感の欠如は乳幼児期の母性的養育体験の不十分さに起因することが多い。現代においては、母親が職業をもっているために育児に専念できないことも多い。ここから、母性喪失が強く訴えられることもある。しかし、母性的養育体験の充足は、時間の長短によって規定されるものではない。職場から解放され、家庭で過ごす短時間の子どものとの接触において、密度の高い母性的養育の充足に心がけるような努力が重要なのである。

一方、母親が在宅して、直接育児にあたっている、母性

喪失がみられることもある。近代社会は、とかく活動性と能率性とは強調される。この中で、女性も本来備えている「あたたかさ」「やさしさ」「こまやかさ」という女性性がある程度切り捨てて、「大らかさ」「きびしさ」という男性原理で、日常生活の諸問題をつきばきと割り切って処理することを余儀なくされることも多い。このような生活態度から、母

親は、育児に際しても、合理性が優先し、生物学的な母性を十分に発揮できないような存在になりがちである。現代の女性にとって、伝統的な女性性を保持しつつ、近代女性として、社会的に十分活動するという両側面の充実が重大な課題となるのである。